

## 袂を分かつ

事務所の中がきな臭くなってきた。誰が味方についてくれるか？その見定めが先決。

陳傳耀は大学時代のクラスメート。一年生の第二学期。どしゃぶりの雨の中、宿舍の軒下に自転車を停めようとしている時、二人は知り合つて、その場で意気投合した。夏休みには百通以上の手紙をやり取りしたこともある。尉官候補生時代も同じ班に配属された。教官に楯突いたかれは金門にやられたが。その後、敏生の懇請を受けて事務所へ。欠かせない相談相手であり、片腕だった。

張蒼浪は一年上の先輩に当たる。大学時代、英文法学名著選読の授業で一緒になった。よく勉強する後輩だという印象を敏生にもつた張蒼浪。のち、敏生が韓忠謨教授の指導で刑事法雑誌に発表した論文を見て、その学識に傾倒するようになる。卒業後は駐華日本大使館に勤務。事務所に入ったのは、やはり敏生の強い勧めがあったから。

この二人はいずれも、敏生の意気に感じて、友人の立場から事務所に尽くしてくれた。今日の台湾国際特許法律事務所を築き上げるために、敏生と手を携え、結局、半生を事務所で過ごすことになる。もちろんこの時も、二人は敏生の力強い味方だった。とくに陳傳耀は、ますます緊張度を加えた内情勢の中、連日敏生と喫茶店で、閉店まで対策を練った。

給料が払えないところまで窮した時、奥さんに内緒で家を抵当に入れ、資金を融通してくれたのも彼だった。しかし財政の窮乏は、まもなく所内中に伝わった。

陳傳耀は良き相談相手だったが、決定はしてくれない。敏生は悩みに悩んだ。めざす道が違う。陳

燦暉との間に芽生えた不信感は拭いきれなかったが、七、八年苦勞をともにしてきた戦友だ。袂を分かつにしても、どう切り出せばよいのか？ 陳燦暉の足も遠のいている。

多事多難のこの時に、陳燦暉の母が世を去った。彼が葬儀にかかりきりになっている間、敏生は一人、来しかた行く末を思った。特許業界に足を踏み入れることも、これまでの実績も、陳燦暉がいなければ出来なかつたことだ。彼の功績は大きい。だが、陳傳耀、張蒼浪、そして敏生自身も法律家である。法律業務が肌にあっているし、事業としても安定している。発明新製品に投資して大もうけしようという陳燦暉のやり方は、金もかかるしリスクも高い。「これ以上一緒にはやっていけない。」と、敏生は冷静に判断した。友情も大切だが、このままでは共倒れだ。

優柔不断に時を費やした敏生の心はようやく決した。会社近くの喫茶店で陳傳耀にそう告げると、敏生はさっそく、陳燦暉を国賓飯店に誘った。

重苦しい空気が流れる。天王山。事業の将来を決する人生の別れ目である。陳燦暉にとっても同様だ。

一九七二年八月末。炎夏だったが、国賓飯店に対座する二人の心は冷えきっていた。

日本の田中角栄首相が九月末、中国大陸に周恩来を訪問する。日中国交成立は間近に迫っている。台湾が日本との国交を断てば、当然のこと日本関係の案件に影響が出る。早急に善後策を講じておかねばならない。敏生はあせっていた。そのためにも、陳燦暉との関係ははっきりさせておかなければ。事務所内の「壮士」が、「身を切る思いで改革を断行せよ」と書いたあの建白書は、一字一句、彼の脳裏にあった。

「事務所の状況が思わしくないのは知っているね？」口を切ったのは敏生。ノートに書き写した営

業報告を陳燦暉に分析して聞かせた。

「また頑張って乗り切るさ。」と陳燦暉。

「……………」敏生はしばらく猶予してから、

「二週間考えたが、道は一つだけだ。」

「え？」

「パートナーを解消しよう。」敏生は手刀を振りおろすしぐさ。

「こんなに早く！どうして今、そんなことを言い出すんだ？」陳燦暉は真っ青になった。彼も同じことを考えていたのは確か。ただ時間的に少しずれがあったようだ。

こういう事は、どう取り繕っても気まずくなる。敏生は続けて、

「これ以上は待てない。解消は私の方から言い出したのだから、条件は君が出してくれ。私は明日から南部に行く。ちようどよい機会だ。事務所の人もよく相談してくれ。事務所を君が引き継ぐことになっても私は構わない。」

台北の事務所に戻った敏生のところに、陳燦暉は彼の親友何世軒を派遣。「二百万元で事務所の株を買い戻してほしい」という条件を言ってきた。敏生の方は陳傳耀を通じ、「百五十万元しか出せない。さもなくば私が百万元もらって会社は譲る。」と答えたが、最終的には、敏生が彼の株を百七十万元で買い戻すことに同意。敏生の持ち株はこれで八〇％。大株主となった。あとの二〇％は張龍飛が持っている。

国際発明特許センターおよびマッチ会社の持ち株は、すべて陳燦暉に無償で譲った。何青棠との共同事業も同様。

保証責任については、第一銀行からマッチの関係で借りた三十万元は陳燦暉の負担。事務所の名義で借りた百万元は敏生が負担することにした。

CTMへの投資をめぐる三百三十万元の債務については、全額、敏生の事務所が引き受けた。この事業は、陳燦暉が辜振甫を説得して出資させたものだから、敏生にはまったく責任がない。だが万一、陳燦暉が訴えられたときには、敏生が証人として出廷すること、しかし陳燦暉がCTMの発明者陳登謨を訴える場合は、事務所をまきぞえにしないことを約束した。

ただ『発明雑誌』には特別の思い入れがあり、手放したくなかった敏生は、事務所の所有とするこゝとで陳燦暉の同意を得た。

パートナーの解消は十月一日に発効。事務所内にはデマが飛び交い、野次馬的な言論があふれた。「敏生には失敗の相が見える。」とか、「負債を抱えて、今度は立ち上がれないだろう。」とか、敏生子飼の若い職員にも動揺が見えた。

陳燦暉の引越しには、将来、謂れのない紛糾が起きないように、事務所ですつと点検するようにと陳博雄に指示しておいたが、十月一日当日、陳燦暉は影も形も見せず、引越し荷物もすべて持ち出した後だった。

がらんとした事務所が、今日はやけに目を引いた。かまびすしかった職員も沈黙を守っている。敏生が事務所に来ると、全員の視線が彼の一挙手一投足に注がれた。どのぐらいたったろうか、足を止めていた敏生は何を思ったか、やおら身を翻し、その場を立ち去った。しばらくして戻ってきた敏生の手には箒が。彼は黙々と掃除を始めたのである。

誰が言い出したわけでもないが、事務所の全員が掃除に加わった。これまでの陰鬱な影を掃き清め

るかのように。

事務所は一新した。気持の落ち着いた敏生は、その日、革新会議を開き、経費節減の方針を掲げるとともに、大錠を振るって、一九七〇年に開設した東京と大阪の連絡事務所を閉鎖した。国交断絶で案件が減ると考えたからであるが、これも節約の一環だった。

案の定、日本からの案件は大幅に減った。断交の月は二件、翌月は七件、年度を合わせても百五件。前年度の約三分の一だ。欧米旅行しておいて本当に良かった。欧米案件はこの年二倍増。事務所を支える柱となり、日本の埋め合わせができた。

事務所が倒産するという噂は、それでも消えず、陳燦暉が新設した特許事務所は、絶えず引き抜き機の機を伺っている。敏生はこうした外界の動きに、見て見ぬふりをしていった。

一九七三年の旧正月。敏生はかなりの無理をしてボーナスを支給した。

ところが年明けに事務所に来てみると、机の上に辞表が三つ。

許燿坤、李魁賢、蘇温光の三人。敏生は一人ずつ部屋に呼んだ。彼らが辞めたがっていることは前々から知っていたが。許燿坤は申し訳なさそうに、手懸けている仕事が終わったらということ、約一ヶ月後に。李魁賢もほぼ同趣旨。蘇温光はあと一、二ヶ月お手伝いしてから、と気前がよかったが、彼の顔を見ているうちにむらむらと怒りが込み上げてきた敏生。「手伝ってもらわなくて結構。辞めるなら明日出てってくれ！」と語気を荒げた。敏生が手塩にかけた男だったのである。「同情など真っ平だ。」敏生は心の中でそう叫んでいた。

三人は相次いで去ったが、彼らの行き先は陳燦暉の万国特許事務所ではなかった。昨年十二月離職した茅及銓と一緒に、新たに特許事務所を設立したのである。

陳傳耀、張蒼浪という強い味方が残っている。敏生は自らを慰めた。「若い人も生きるためには仕方がなかったのだ。」くよくよしないことにしよう。かえってこの二人の方が驚いた様子で、「万事休す。また三人もやめたのか。」としきりに残念がった。

しかし一九七三年度の決算で、営業額は一千万円を越えた。純利益四百万。主要幹部には当年に配当を行った。

生まれ変わった台湾国際特許法律事務所は、ここから進軍を開始する。営業量は増える一方。毎年記録を更新している。

## 独資王国

総務不在では財政の管理ができない。敏生は、彰化銀行に十年近く勤務していた弟の寅生を事務所の総務主任に抜擢した。それにしても前任者が持ち去った十数枚の小切手は、いつ爆発するか分からない爆弾のようなもの。印鑑を取り返したときに、どうして処分しなかったのだろうと、今さらながら悔やまれた。事務所の財政はまだまだ不安定。「小切手を切られたらどうしよう」と、眠れない日々が続いた。

寅生就任の翌日。来るべきものがやってきた。十萬元の小切手が銀行に持ち込まれたのである。敏